ResidentEvil FrontLine

廼瀧

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交わることの無い２つの世界。生物災害との戦いの果てに散った男達は異なる世界へと飛ばされる…そこは少女を模した人形達が戦う世界だった。

目　次

第1章～交わる2つの世界と3つの刻～
鷲とＡＲ小隊 ―― 1
隼と４０４小隊 ―― 11
鷲と隼の出会い ―― 25

第1章～交わる2つの世界と3つの刻～

鷲とＡＲ小隊

２０１７年１２月１４日、北米某所のコネクション研究施設跡のとある一室にキーボードを叩く音が響いていた。

「…ダメか、このデバイスもショートしている、厄介なことをしてくれたな。」

耐ＢＣベストの上にチェストリグを着込み、特徴的なガスマスクを着用した男が１人ごちる、傍らには大柄なＳＧ［アルバート・Ｗ・モデル０２　トールハンマー］が置いてある。

「隊長、此方も映像ディスクや資料などはすべて持ち出されてしまっています、やはり我々が来ることを想定していたのでしょう。」

ドアが開き、同じ装備をした隊員が男に声を掛ける、彼等はアンブレラ社特殊事案処理チームと呼ばれる、嘗てのアンブレラの贖罪を目指す、新生アンブレラ社の特殊部隊の隊員だ。部下に声を掛けられ、隊長と呼ばれた男は振り返り。

「そうか、やはり一筋縄では行かなそうだな、この施設はもうもぬけの殻だろう。」

そして隊長はヘルメットのヘッドセットを操作し。

『本部、此方アルファチーム、イーグル、施設は既に放棄された後のようだ、これ以上の調査は無意味と判断する、オーヴァー。』

〝此方本部、了解、直ちに帰還せよ、アウト〟

『イーグル了解、アウト』

短い通信を終え、トールハンマーを手に取り、イーグルは全隊員へと通信を入れ、全員が集まると部屋を出て施設を歩きだす。

「隊長、貴方は嘗て旧アンブレラの人間だったという話は本当ですか？」

施設のエントランスホールに差し掛かると、１人の隊員が声を上げる、その声にイーグルは少し重い声で返した。

「無駄口を叩いてる暇はないぞ、放棄されているとはいえ、いつ奴等が沸くかわからないんだ。索敵は怠るな。」
「…すいませんでした。」
叱責され、隊員は少し気落ちした口調で謝罪する、その時だった。
うぅぁぁぁぁ…
うめき声が聞こえ、開いたドアの一室からカビ人間のような怪物、【モールデッド】がよろめきながら現れた。
「総員！密集隊形！モールデッドを近づけるな！」
イーグルが声を上げて全隊員に告げる、隊員が迅速に密集隊形を組む、それとほぼ同時にホールの至る所に生えたカビの塊から多数のモールデッドが這い出てきた。
「ファイア！」
イーグルの指示で全方位に展開した隊員のトールハンマーが火を吹く、フルオートで発射された12ゲージ弾は瞬く間にモールデッドを粉砕する。
だが…
「隊長！数が多過ぎます！このままではジリ貧です！」
確かにモールデッドを倒してはいるがモールデッドはカビの塊から続々と這い出てくる、数で押されてはどうしようもない、事実少しずつ、モールデッドが迫って来ている。
「チッ、今からグレネードを投げる！全員その隙を駆け抜けろ！」
イーグルは声を荒げ、ベストに付いたM67グレネードを取り出す、ピンを外し、手で少し遊ばせ、ドアへと続く道を塞ぐモールデッドに投げ込む。狙い通り、グレネードは大爆発を起こし、その道に隙間ができる。
「今だ！行け！」
隊員へと指示を飛ばし、最後にイーグルも駆けだす、しかし…
うげぇぇぇ…
ぁぁぁぁ…
肥満体のモールデッド【ファット・モールデッド】
腕が鋭い刃へと変異した【ブレード・モールデッド】

四つ足の【クイック・モールデッド】が姿を現わす。
特殊変異体のオンパレード、今の状況では最悪だ、イーグルは最後の隊員が
部屋の外へ出るのを一瞬見つめ、覚悟を決める。
「!?、隊長！何をするつもりですか!!」
「行け！お前らは脱出して本部に報告しろ！」
ドアを叩くように閉める、そして近くの棚を倒し、完全にドアが開かないようにした。
「さて…どこまで持つか…。」
トールハンマーの残弾数は今装填しているマガジンで最後、セカンダリーのゲイルラプター０１Ｅは残り２マガジン、グレネードはついさっき投げ込んでしまった。
うぁぁぁ！
クイック・モールデッドがその俊敏な動作で飛びかかるが腿のホルスターから流れるようにゲイルラプター０１Ｅを引き抜きその頭部に狙いを付け、引き金を引く。
銃口から、５０ＡＥ弾が吐き出されその威力はクイック・モールデッドを吹き飛ばす。
うぉげぇぇぇ!!
ファット・モールデッドの吐き出す液体がベストを掠める、すると焦げたような音がなり、ベストが焦げ付く。
「チッ、これは被ったらやばいな。」
ファット・モールデッドにゲイルラプター０１Ｅを撃ち続けるがその背後からブレード・モールデッドが飛びかかって来た。
「しまっ…！」
腕の刃がイーグルの脇腹を切り裂く、分厚いベストを突き抜け、肉を抉られる。
「ぐぁぁ!!」
激痛にマスクの中で顔を歪めながらもゲイルラプター０１Ｅをブレード・モールデッドの頭部へ撃ち込む。
うぁぁ…

短い悲鳴を上げてブレード・モールデッドは力尽きるように倒れこむ。
「はぁ…はぁ…。」
痛みに耐えながら、ベストのポケットから回復アンプルを取り出し、左腕に突き刺す。
ぅぉげぇぇぇ！
ドスドスと重い足音が響き渡り、その方向を見遣ると頭と手が無いファット・モールデッドが迫って来ていた。
「うぉっ!!」
その巨体に弾き飛ばされ床に倒れこみながらもゲイルラプター01Eを構え、ファット・モールデッド2体のそれぞれ両足を撃ち抜く。
ぅぉぉぉ…
バチュン！と音を立ててファットモールデッドが破裂した。
「なんとかなったか…。」
深い息を吐き、近くの壁にもたれ掛かる、血を流し過ぎた為か意識が遠のいて来る感覚に襲われる。

～　ＡＲ小隊Ｓｉｄｅ～
「これで最後ね。」
荒れ果て、廃墟が立ち並ぶ町、そこで長髪の黒髪を靡かせ、一部を緑色に染めた少女が声を発する。その顔立ちは整っており、その手に持つ銃と合わせても様になっている。
「Ｍ４、周囲に鉄血の反応は無し、任務完了だ。」
「ありがとう、姉さん。」
Ｍ４と呼ばれた少女に声を掛けたのは同じような黒髪に三つ編み、黄色のメッシュが入り、右眼に眼帯を着け、大きなガンケースを背負った少女だった。彼女の言う通り、２人の周りには鉄の残骸らしき物が散乱している。彼女達は人間ではなく、戦術人形と呼ばれているアンドロイドであり、ＰＭＣ《グリフィン＆ａｍｐ；クルーガー》の誇る精鋭部隊、ＡＲ小隊のメンバーである、残りのメンバーである２人はピンクの長髪をワンサイドアップで纏めたＳＴ　ＡＲ１５。金

髪に赤いメッシュが入り、特徴的なヘッドギアを着けたＭ４　ＳＯＰＭＯＤⅡだ、それぞれ、ＡＲ１５は見張り、ＳＯＰＭＯＤは戦利品を集めに行っている。
「作戦は完了、皆、帰還しますよ。」
「えー！まだコレクション集め終わってないよー！」
　Ｍ４が帰還の指示を出すとＳＯＰＭＯＤが不満の声を上げる、コレクションと言うが、その手には明らかに目玉に見える部品や、オイルにまみれた腕の部品など一般的に見たらコレクション？となるようなものを持っていた。
「ＳＯＰＭＯＤ、あまりワガママを言ってはダメよ。」
「ハハッ、私も早くビールが飲みたい所だな…ん？」
　ＡＲ１５がＳＯＰＭＯＤを咎める中、Ｍ１６が何かに気付き、声を出した。
「姉さん、どうかしましたか？」
　Ｍ４が振り返り、尋ねた。
「Ｍ４、近くに生体反応だ、反応からしておそらく人間だろう。」
「人間？そんなはずは無いわよ、ここは鉄血との最前線じゃない。」
「だが確かにこの先に反応があるんだ、もし民間人なら救助しなければならないだろう？」
　どうするＭ４？とＭ１６が聞くとＭ４が口を開く。
「その反応の場所へ行きます、Ｍ１６の言う通り、民間人ならば救助しなければなりません、仮に鉄血の残党なら殲滅するのみです。」
　Ｍ４は捜索すべしと判断し、指示を出す。
ーーーーーーーーーーーーーーーー
　ＡＲ小隊が発信源を辿り、着いた先はとある廃墟だった、見た目からしてなにかの施設だったたであろう建物はすっかり風化してしまっている。
「ここですね、皆さん、索敵は怠らないように。」
「「「了解。」」」
　Ｍ１６が先頭になり、銃を構え、油断なく進んで行く、どうやら発信源はかなり奥のようだ。

「うぇぇ…埃っぽいよー。」
「ホントね、早く帰って休みたいわ。」
　廃墟内を進む中、ＳＯＰＭＯＤが不満の声を上げる、確かに、長い間放置されていた為か砂煙や埃が歩くたびに舞い上がる、ＡＲ１５も銃を構えながら同意する。
「どうですか？姉さん。」
「このドアの先だ、反応は動いてない、間違いなくこの中だろう。」
　Ｍ１６が呟き、４人は一斉に構える。
「３、２、１…Ｇｏ！」
　Ｍ４の号令と共にＭ１６がドアを蹴破り、４人が突入する、そこに居たのは…。
「！、民間人ではなさそうだな。」
「ええ、服装もさることながら、側の銃、見たことない銃だけど少なくとも民間に流出しているものではなさそうね。」
　壁にもたれ掛かるように倒れているのは明らかに民間人では無い装いの人間だ、全身を分厚いベストや多数の予備弾薬用のポーチが付いたチェストリグに身を包み、そして何より特徴的なのは顔の全面を覆うマスク、最初は人権団体の人間かとおもったがここまで充実した装備を人権団体が用意はできないだろう。
「脈はあり、原因は…!?、姉さん、すぐに本社に連絡を！この人、脇腹に裂傷が見られます！」
「わかった！」
　Ｍ４が声を荒げ、Ｍ１６は無線を取り出し、グリフィンに連絡を入れる。
『こちらＭ１６、負傷した人間を発見、至急、救援を要請する。』
「ねーねー！このポーチに止血帯とか入ってるよー！」
　ＳＯＰＭＯＤの声が聞こえ、その視線の先には人間の左腿のポーチを開け、笑顔を浮かべるＳＯＰＭＯＤが居た
「ＳＯＰＭＯＤ、あまり勝手に触らないようにしなさい、でもお手柄よ。」
　ＡＲ１５がＳＯＰＭＯＤに注意するが今の状況では有り難いもの

だ、Ｍ４はＳＯＰＭＯＤの見つけた止血帯、消毒薬を使い、手早く処置を施す。
「ぐっ…うぅぅ…。」
　人間が一瞬、苦しそうな声を上げるが、すぐ先程よりも幾分か和らいだようだ、マスク越しの為、表情は見えないが呼吸も安定してきていた、落ち着いた所で４人は改めて、その人物を観察した。
　胸に２本のマガジン、グレネードや予備弾薬が入っていたであろうポーチの中は空、それぞれ４色の液体が入ったシリンダー、先程の簡易医療器具が入っていた左腿のポーチ、反対には大型のＨＧの入ったホルスター、あまり見かけない形状の顔全体を覆うマスク、何より特徴的なのは側に落ちていたであろう銃だ。
「これは…少なくともグリフィンの保有している銃では無いな。」
　Ｍ１６が慎重にその銃を持つ、先端がギザギザの銃口、ハンドガードはかなり肉抜きされていてその重厚な見た目よりも軽く感じる、ダンプポーチに入っていたマガジンはハーフスケルトンとなっており、口径からから見て、１２ゲージ弾が装填されていることからこの銃はＳＧだろう。
「Ｍ４、やはりこの人間は只の民間人ではなさそうだ。」
「姉さん？何故そう言い切れるのですか？」
　この人間は民間人では無い、Ｍ１６の確信した様な言い方にＭ４は尋ねる。
「この文字を見てみろ、
《ＵＭＢＲＥＬＬＡ　ＣＯＲＰＯＲＡＴＩＯＮ》、こんな名前のＰＭＣは聞いたことがないし、この様な形状のＳＧは見たことが無い。」
　普通では無い服装に装備、見たことも無いＳＧ、実在しない会社名、考えれば考えるほど謎が深まる、４人はどうするべきか悩んでいると…
「ッ…こ、こは…？」
　その声に４人は銃を構え、振り向く、先程まで気絶していた人間が目を覚ました様だ、マスク越しの為、声がくぐもっているが声音からして男性だろう。

「な…!?待て！少なくともこちらに敵意はない！銃を下げてくれ！」
　男の声に４人は油断無く銃を構え、そしてＭ４が尋ねる。
「貴方の所属と此処に居た経緯を話してください、それと武器を地面に置く様に。」
「了解した、これで良いか？」
　Ｍ４の鋭い声に男はタクティカルナイフとスモークグレネード、そしてホルスターのＨＧをゆっくり地面に置くと、両手を上げ何も持っていないとアピールする。
「改めて、貴方の所属と経緯を話して下さい、決して誤魔化す様な行為はしないことです。」
　男が武器を置いたことで４人も銃を下げる、そして男が口を開く。
「俺はアンブレラ社特殊事案処理チーム、アルファチーム隊長、ハルキ・ブルースペース、コードネームはイーグルだ、コネクションの研究施設を捜索中、モールデッドの群れに襲われ、交戦、ブレードに脇腹をやられ、意識を失っていた、君達こそ何者だ？ここはアンブレラが立入禁止区域に指定していたはずだが？」
「アンブレラ？コネクション？それにモールデッドなんてそれらしい物は見かけてないですが？誤魔化しはするなと言ったはずです。」
　ＡＲ１５は顔をしかめながら否定する、するとイーグルと名乗る男は一瞬考える仕草をする。
「アンブレラを知らない…？それにモールデッドが居ないだと？君達こそ所属を教えてくれると有難いんだが、どうも話しが噛み合っていない気がする。」

　イーグルの言葉にＡＲ１５は何を言っているのかわからないという表情を浮かべる、ＳＯＰＭＯＤは理解していないのか頭に疑問符を浮かべながら聞いている。
「私達はグリフィン所属、ＡＲ小隊、私は隊長のＭ４Ａ１です。」
「私は副隊長のＭ１６Ａ１だ。」
「ＳＯＰＭＯＤⅡだよ！よろしくね！」
「ＳＴＡＲ１５よ。」

４人の名前と所属を聞くもののイーグルは信じることができなかった。
「Ｍ４にＭ１６？コードネームか何かか？、それにグリフィンなんてこちらも聞いたことがないぞ？」
お互いに何一つ聞いたことがないとことだらけとなり、気不味い空気が流れる。
「仕方ありません、それとハルキさんでよろしいですか？貴方をグリフィンへ連れて来るよう命令を受けました、抵抗はしないでください、こちらも出来れば危害は加えたくありません、良いですか？」
Ｍ４の提案にイーグルは溜息を一つつくと素直に提案を受け入れる。
「あぁ、わかった、それとその銃は丁重に扱ってくれよ？」
イーグルはトールハンマーを指差して告げる。
「わかっている、この銃は私が責任を持って預かろう。」
Ｍ１６がトールハンマーをしっかりと持ち、ガンケースにしまう。
「ねね！そのマスク取ってよ！自己紹介したんだし素顔も見たい！」
無邪気な笑顔を浮かべながらＳＯＰＭＯＤがマスクをペシペシと叩きながら言う。
「わかったわかった、だから叩くのはやめてくれ。」
ＳＯＰＭＯＤの人懐っこさに毒気を抜かれてイーグルはヘルメットとマスクを外す。
「ほー、中々良い男じゃないか。」
Ｍ１６がお世辞抜きに感嘆を漏らす、マスクの下は黒の短髪にやや赤みがかかった瞳、全体的に整った顔立ち、とても銃を握りしめる男とは言い難いがその瞳には確かな覚悟や闘志が宿っている。
「そうか？あまりその様な評価は受けたことが無いからな…。」
その後、５人は互いの情報交換をし何事もなく指定のＲＺ（ランディングゾーン）へと到着する。
ーーーーーーーーーー
大きく異なる世界、若き大鷲はその世界で何を見るのか、鉄血とは何か？鉄血は何故人類へその牙を向けたのか？イーグルがこの世界

へと来たその理由は？

そしてもう1人、気高き隼が同じくこの世界へと足を踏み入れる、鷲と隼、2人の出会いはもう少し先の話、そしてそこから物語は動き出す。

隼と４０４小隊

２０１３年６月３０日、中国、今中国は大規模なバイオテロの脅威に晒されていた、ネオアンブレラが所有する超巨大空母より、カーラ・ラダメスの研究により発見された、新型のウィルス兵器であるＣ―ウィルスを搭載したミサイルがターチィに撃ち込まれ、ウィルスが蔓延、一晩でターチィの町はバケモノが闊歩する、地獄へと変貌した。

「ヘレナ！無事か!?」

ターチィの一角、そこで茶髪に片目を隠した男は声を張り上げる。

「ええ！無事よレオン！」

ヘレナと呼ばれた女は応える、しかし状況は芳しくなく、寧ろ絶望的だった。

「チィッ、武器が効いてない…どうすれば…」

レオンと呼ばれた男、本名をレオン・Ｓ・ケネディ、ラクーン事件を生き抜き、数多のバイオハザード事件を解決し、合衆国のエースエージェントへと成長した生きる英雄の１人である、そんな彼を持ってしてもこの状況を打破するのは難しかった。

「弾薬も少ない…このままではやられる。」

レオンはＨＧ（ハンドガン）［センチネルナイン］を構えながら呟く、持っていた武器は粗方使い切ってしまった、ヘレナも弾薬が残り少ないＳＧ［ハイドラ］を撃ち込むが目の前の恐竜のようなバケモノには大した効果は認められない。

目の前の恐竜、このバイオハザードの黒幕であるディレック・Ｃ・シモンズが強化型Ｃ―ウィルスを投与され変異した姿である、（以降シモンズ）最早ヒトとしての原型等留めておらず只目の前の獲物を喰い殺す事だけを目的としてシモンズはレオン達に襲い掛かる。

「レオン！こっちもほぼ弾切れよ！」

「ヘレナ！君は逃げるんだ！このままでは２人ともやられる！」

ヘレナだけでも逃がそうとレオンは少ないセンチネルナインをシモンズの目や急所付近を狙い撃つ。シモンズは微かによろめき、レオンへとその視線を向ける。

「さぁ、来いシモンズ！」
　レオンはセンチネルナインを構える、シモンズがその顎門を大きく開けてレオンの元へと駆け出した瞬間、低い銃声が鳴り響く、レオンがその音の発信源を見遣るとジープが一台とヘリが飛んでいた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　ファルコンｓｉｄｅ
「こちらファルコン、ポイントRを通過、道中に妨害等は無し、作戦は順調に進行中、オーヴァー。」
　〝こちらＨＱ、現在のルートを維持し、ポイントスペードを目指せ、オーヴァー〟
「ファルコン了解、アウト」
　レオンとヘレナがシモンズと死闘を繰り広げているエリアから少し離れた場所、乗り捨てられ、炎上している乗用車やトラック等が散乱している道路を走るジープの運転席にて通信を行なっているのはヘッドバンドのようなイヤーマイク、口元だけを覆うバラクラバを装着し、タイトな戦闘服に身を包んだ薄紫色の髪をした男だ、助手席には彼のプライマリーウェポンであろう入念にカスタムされたＵＭＰ９が置いてある。
「それにしても酷い光景だ…あの時のラクーンを思い出してしまうな。」
　片手で左肩に着いた《ＢＳＡＡ》のワッペンを握り締め、1人呟く、ファルコンと呼ばれたこの男はこのＢＳＡＡ創設に伴い、スカウトされる前に所属していた、ＳＰＥＣ　ＯＰＳ時代、ラクーン事件解決の為、地獄の町を奔走していた時を思い出していた、そこで出会ったレオンは大切な戦友であり、良き親友であった、ＢＳＡＡにスカウトされた際はバイオテロの最前線で戦えると思い、高揚したがやはり実際の現場を見るのはいつまでも慣れる事はない。
「クリスやピアーズ、マルコ達は無事だろうか…まぁクリスは死ぬ光景があまり浮かばんが…ん？」
　別働隊であるクリス・レッドフィールド率いるアルファチームの身を案じ思わず口を零す、その時、曲がり角の向こうで銃声が鳴り響き、

不審に思ったファルコンはジープを停め、ジープの後部座席に着けられた銃座の下からドローンを取り出した。
「生き残りの可能性がある、ゴーレム、こちらファルコン、銃声が聞こえた、ドローンを飛ばすがヘリからの確認を要請する。」
『こちらゴーレム、了解、』
上空を飛ぶ同じくBSAA所属のヘリパイロット、ゴーレムへと要請を飛ばす、
『見えたぞファルコン、茶髪の男が1人と同じく茶髪の女が1人だ、望遠レンズから撮った映像を送る。』
ファルコンの端末にゴーレムからの映像とドローンからの映像が送られる、その映像を見たファルコンは驚いた。
「レオンじゃないか!ゴーレム!この映像は確かなんだな!?」
『おいおい!落ち着けよファルコン、いつも冷静なお前らしくないぞ？』
いつもと様子が違うファルコンにゴーレムは慌てて宥める。
「すまん、だが俺は2人の救援に向かう、ゴーレム、お前達はそのままポイントスペードを目指せ。」
『なーに言ってんだ、俺達も行くぜ?その慌てようだと大方知り合いか何かなんだろ?ヘリからの援護くらいはしてやるさ。』
「…すまん、恩にきる。」
ゴーレムの言葉にファルコンは微かに笑みを浮かべた。
そしてファルコンはジープのアクセルを深く踏み込み、レオン達の元へと急行した。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「うぉぉ!!」
シモンズが吹き飛ばしてきた瓦礫を間一髪で回避したレオンは近くのタンクローリーを撃ち、シモンズの足止めを試みる。
グォォォ!!
狙い通り、シモンズは怯み数歩程後退りをした。
「いよいよヤバイな…ハッ、泣けるぜ。」
もう弾も僅かしか無くいよいよ諦めかけたその時。

「レオン!!無事か!」
瓦礫の向こう側からジープが勢いよく飛び出し、運転席のファルコンが叫ぶ。
「オイゲン!?オイゲンなのか!?」
嘗ての戦友であり親友である男の顔を見てレオンが驚愕の声を上げる。バラクラバで隠されてもその顔を見分けるのは簡単だった。
「何故ここに?それに何だあれは?」
レオンはファルコン…オイゲンに説明をしようとしたがそんな猶予は残されていない。レオンが口を開く前にファルコンが後部座席を示し。
「まぁ良い、2人とも、乗れ!」
レオンとヘレナが後部座席に飛び込むように乗り込むとファルコンはアクセルを全開に踏み込み、ジープを急発進させる、当然、シモンズもその強靭な脚で
ジープの追跡を行う。
「もっとスピードは出ないの!?」
ヘレナが機銃をの引き金を引きながら叫ぶ。
「悪いな、これが限界だ!」
ファルコンの言葉に偽りはない、シモンズのスピードが想定よりも早く、3人の人間に武装を積み込んだジープではどうしてもスピードは出ない。そしてシモンズが近くの車を咥えジープへと放り投げる。
「うぉぉぉ!?」
ファルコンが思い切りブレーキを踏み込んだ事でどうにか軽い衝突で済んだがシモンズがすぐ近くまで迫って来る。
「レオン!ヘレナ!兎に角撃ちまくれ!ヤツを近づけさせるな!」
言葉通り、レオンとヘレナはシモンズの頭部に機銃を撃ちまくる。ヘリからも同様に機銃弾の援護も開始され、シモンズは大きく仰け反る。
「今だ!」
勢いよく方向転換を行い、空いた道路を再び全速力で走る。
「良いぞ!そのまま弾丸を喰らわせてやれ!」

何とか奮戦するも遂にシモンズがジープのサイドに噛み付いた。
「ヤバイ!!レオン!・ヘレナ!・飛び降りろ!」
このままではマズイと直感したファルコンは2人に飛び降りろと叫ぶ。
「ヘレナ!・飛び降りるぞ!」
レオンがヘレナを抱き抱え、ジープから飛び降りる。
「うぉぉぉ!?」
レオン達が飛び降りると同時にシモンズは掬い上げるようにジープを投げ飛ばす。
「ファルコン!?」
ヘレナはファルコンの身を案じ声を荒げる。
「大丈夫だ!・お前らは早く行け!」
ファルコンはレオン達に大丈夫だと応えるが、ファルコンの乗っていたジープは何とか走れる状態ではあったがフロント部分が凹み、ブレーキ側の脚が挟まってしまっていた。
「…ここでレオン達を死なせる訳にはいかないな…」
フッと微笑を浮かべファルコンはある決断をくだす。
「レオン、何があっても振り向かずに走れ!・俺がシモンズを足止めする!」
ファルコンはアクセルを踏み込み何とシモンズに向かって突貫していく。
「オイゲン!?何をしている!・やめろ!」
ファルコンの行動を理解したレオンは悲痛の顔を浮かべファルコンに叫ぶ。
「レオン!・絶対世界を救え!・良いな!・俺には出来ないがお前ならできる!」
それがファルコンの最期の言葉だった。
ドォォォォン!!
ファルコンのジープはシモンズの足元へ衝突し、大爆発を起こした。
「「オイゲェェェェェェェン（ファルコォォォォォォォン）!!!」」

レオンとヘレナの悲痛な叫びが木霊する。此処に英雄を護った歴史に語れる事の無い、誇り高き隼は散って逝った。

筈だった…

ーー

ファルコンｓｉｄｅ

「う、ううん…?此処は?」

ファルコンは日差しを感じ、目を覚ます。

「何だ…?あの世っていうのはこんなに荒廃した世界だったのか?」

確かに死んだ筈、そう思ったファルコンは周りに広がる廃墟や荒野を見て溜息をついた。

「ごちゃごちゃ考えても仕方ない、周囲を探索してみるか。」

何故か側には装備がそのまま残っていたので回収し、周囲をクリアリングしながら廃墟を出る。

「まるで核が落ちた後みたいだな、それにしてもマスクを装備してて良かった。」

とてもマスクを外しての呼吸ができるとは思えないほどの砂塵が舞う中ファルコンはＵＭＰ９を構えながら廃墟の街を進んでいく。

ーーーーーーーーーーーー

???ｓｉｄｅ

「はぁ…はぁ…」

とある廃墟の中、１人の少女が脇腹を抑えながら歩いていた、その脇腹からは血のような液体が流れている。

「油断した…!まさか待ち伏せを喰らうなんて…」

明るい茶髪をツインテールに結び、右目に切創が付いた可愛らしい顔立ちをした少女だ、その顔は今は痛みに歪んでいる。

「45姉…助け…」

弱々しく呟き、少女は倒れんでしまった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ファルコンｓｉｄｅ
「しかし人っ子一人いない…あるのは鉄屑だけだな。」
ファルコンはさっきまで居た街とは別の街に辿り着いたが相変わらず人が居なく、変わったのは鉄屑が転がっているくらいだった。
「ドローンでも飛ばせば周囲がわかるか、なぜ気づかなかったのか…」
一旦落ち着き、回収したドローンを真上に飛ばす。
「ふむ、ダメだな、周りは同じく荒野と廃墟だけか…この街も外れか…ん？」
ふと映像の隅の方に何かが映り込む、不審に思ったファルコンはドローンを操作し近づける。
「おいおい…何で女の子が倒れてるんだよ…」
ファルコンはドローンを戻し少女の元へ向かう事にした。
ーーーーーーーーーーーーー
「さて、ドローンの位置情報ではこの辺りに…」
あの後ファルコンは少女を発見した場所付近へ移動し、周囲を見渡す。
「居たな、って怪我してるのか、それに血の跡がある、かなり無茶をしたらしいな。」
少女の歩いてきた道には血の跡が点々とありどうやら負傷した状態で歩いていたのだろうとファルコンは考える。
「まずは止血だな、緊急だから勘弁してくれ…よっと。」
ファルコンは少女をお姫様抱っこで抱え、近くの廃墟に入る。
「良し、止血完了、包帯は無いか…」
止血処置を終わらせたファルコンは近くに転がっていた椅子に腰掛けＵＭＰ９のメンテナンスをしながら少女が目覚めるのを待つ。
「う？此処は…？」
あれから数分程で少女は目を覚ました。
「目が覚めたか。」
「!?」
ファルコンが少女に声を掛けると少女は咄嗟に身構える。
「お前は!?アイタタ…」

「おいおい、無理はするな、まだ止血したばかりだぞ？」
少女は脇腹を抑え踞り顔をしかめ、ファルコンは無理はするなと声を掛ける。
「これ…貴方がしてくれたの？」
少女は脇腹のガーゼを指差し尋ねる。
「ああ、包帯は生憎持ち合わせていなくてな、すまんが勘弁してくれ。」
ファルコンは少し申し訳無さそうに言うと少女は笑顔を浮かべ。
「ううん、ありがとうね、それにその銃、少し形が違うけどＵＭＰ９でしょ？」
「へぇ、良く分かったな、おっと、自己紹介がまだだったな、俺はオイゲン、オイゲン・Ｙ（ユリ）・ボーデヴィッヒ、コードネームはファルコン、まぁオイゲンでもファルコンでも好きに呼んでくれ、君の名前は？」
ファルコンも笑顔を浮かべ少女に名前を聞く。
「ＵＭＰ９！９（ナイン）って呼んでね！」
「ＵＭＰ９？本当に本名なのか？そう言えば側に落ちてた銃もＵＭＰ９だったな、まぁそれよりもだ、９は何故あそこで倒れていたんだ？」
大方コードネームか何かだろうとファルコンは考え、一番の疑問を９に問いかける、すると９は急に涙目になり。
「そうだ！４５姉達とはぐれちゃったんだ！どうしよう…」
「落ち着け、まずははぐれた状況を説明してくれないか？」
取り乱す９を宥め、ファルコンは軽く背中をさする。
「うん、私達は４０４小隊って言う小隊を組んでいて、作戦行動中に鉄血の待ち伏せを受けて私だけはぐれちゃったんだ。」
断片的ではあるがおそらく負傷したせいで鉄血とやらに集中的に狙われていたのかもしれない、弱い敵や負傷した敵から狙うのは戦場の定石だ。
「それなら集合地点やＲＺ等はわかるか？それと無線などもあれば有難い。」
ファルコンが尋ねると９は腰に下げたバッグから地図を取り出す。
「私がはぐれた場所は此処、そして指定のＲＺは一番近い所でも此処

だね。」
９が指差す二ヶ所は森を隔て、そこそこ離れている、おそらく無我夢中で逃げていたのだろう。
「ふむ、無線は有るか？」
ファルコンは無線の有無を尋ねる、彼の無線を使っても良いがそれだと通信相手に不審に思われてしまう為最終手段だ。
「ううん、私達戦術人形達は基本、人形間の通信規格があるから無線は基本持たないんだ。」
首を横に振る９を横目にファルコンは暫し思案する。戦術人形、鉄血、人形間の通信規格、聞いたことのない単語の数々にＵＭＰ９、そして戦術人形を名乗る少女、少なくともファルコンはどれも聞いたことはない。
「わかった、その通信規格は使えないのか？」
今は生き残ることが最優先だ、一般人ならば取り乱すだろうが、歴戦の兵士であるファルコンは余計な考えは頭から消し去り、生き残る為の手段を模索する。
「実は攻撃を受けた時そのシステムに一部エラーが出てるんだ、だから下手をすると鉄血に位置がバレちゃうと思う。」
通信ができないとなるとＲＺまでステルスで移動し、そこでファルコンの無線を使うか直接４０４小隊とやらと合流するか、どちらかしかない。
「９、戦えるか？同じ銃なら弾薬は少しは渡せる、ＲＺまでのルートを辿り、小隊と合流しよう。」
ファルコンは４０４小隊と合流する方法を取る、恐らく傷の状態からして時間はあまり経っていないだろう、痕跡や指定されているであろうルートを辿れば合流できる筈だ。
「良し、急ぐぞ９、背中は任せるぞ？」
「…うん！任せて！」
ＵＭＰ９とファルコンは行動を開始する、果たして無事に合流することはできるのか…。
ーーーーーーーーーーーーーー

４０４小隊ｓｉｄｅ

「９…無事で居て…！」

ファルコンと９が行動を開始して数時間、ファルコン達が居た場所から数キロ程離れた薄暗い森の中を３つの影が疾走している、先頭を行くのは暗い茶髪に９とよく似た顔立ちの少女だった、その後ろを追従するのは銀髪にベレー帽を被った少女と白髪に帽子の様なものを被った少女だった。

「４５！落ち着きなさい！このままだと鉄血の奴らにまたバレるわよ!?」

「うう～…待ってよぉ～。」

４５と呼ばれた少女は走るスピードを緩めず後ろの少女に振り返らず返事を返す。

「奴らに奇襲されて９が負傷したのよ！このままだと奴らに殺される！４１６！Ｇ１１も早くしなさい！」

４１６と呼ばれた少女…ＨＫ４１６とＧ１１は取り乱す４５…ＵＭＰ４５に追いつき、その両肩を抑えつける。

「心配なのはわかるけど落ち着きなさいと言ってるでしょう！こんなんじゃ鉄血にバレて私達もやられるわ！少しは隊長として考えて行動しなさい！」

４１６が怒鳴ると４５はハッとした表情を浮かべ苦虫を噛み潰したような顔になる。

「ねぇ４５、９とはぐれてまだ数時間もたってないよね？ならはぐれた場所に戻った方が多分良いよ、それかグリフィンに救援を要請した方が絶対良い。」

「ええ、私もＧ１１に賛成ね…ッ!?敵！１０時の方向！複数よ！」

４１６が銃を構える、森の茂みからバイザーをつけ、ＳＭＧを持った黒や紫のカラーリングをしたアンドロイドが１０体、飛び出して来た。

「くっ…敵の増援部隊ね！押し通るわよ！」

４０４小隊は黒紫のアンドロイド…【Ｒｉｐｐｅｒ】との戦闘を開始した。

ーーーーーーーーーーーー
「9、だいぶ近づいたと思うがまだか？」
「ちょっと待ってね…うん、この森を抜ければその先がＲＺだよ。」
ファルコンと9は森の手前で立ち止まり、ルートの確認を行う。
「良し、日が暮れる前に森を抜けよう、ん？銃声が聞こえるな。」
ファルコンのヘッドセットの集音マイクが銃声を聞き取る。
「この音だと…ケースレス弾？となるとＧ１１か、随分変わり種の銃を使うな…それと、４５ＡＣＰ弾か。」
音の周波数や、音の聞こえ方を分析しファルコンは銃の種類を予想する。長年の経験からすれば大まかではあるがこのくらいはできるだろう。
「9、恐らく戦闘が起きている、慎重に行こう…おい9!?」
「きっと４５姉だ！ファルコン！ごめん！先に行くね！」
ナインは弾かれた様に森走り出し、森の中へと行ってしまう、慌ててファルコンも後を追いかける。
ーーーーーーーーーーーー
「カバー！Ｇ１１！援護して」
４５が左側面のＲｉｐｐｅｒの頭を撃ち抜き、Ｇ１１へ指示を出すその声の一瞬後反対から飛び出して来たＲｉｐｐｅｒが四肢と頭を撃ち抜かれる。
「４５！どうする!?敵の数がなかなか減らないわ！」
接近して来たＲｉｐｐｅｒの首をナイフで切り裂き、蹴り飛ばした４１６が指示を促す、少し離れた岩陰から狙撃をしているＧ１１も弾薬が残り少ないだろう、空になったマガジンが周りに散らばっている。
「チッ…弾幕を張りつつ後退！とにかく森を抜けるわ！」
「了解！」
ファルコン、9、到着まで後数分
「9！迂闊に飛び出して何のつもりだ!?また敵の待ち伏せを喰らうぞ！」
息を切らせながらファルコンは怒鳴る、仲間が近くに居るかもしれ

ない、確かに急ぐ気持ちはわかるが今は敵地の真っ只中、これでは撃ってくれと言っている様なものである。
「ごめん…ッ!?ファルコン、あそこ！」

ナインが指差す先には９とよく似た少女に赤紫の人影が銃口を向けている光景が飛び込んできた。
「クソッ！間に合え…!!」
ファルコンはＵＭＰ９を構えその人影の頭部に狙いを付け、引き金を引いた。放たれた９㎜パラベラム弾はその人影の頭を真っ直ぐに撃ち抜いた。
「ッ!?誰?!」
９とよく似た少女は不意の銃撃に素早く反応し手に持つ銃…ＵＭＰ４５を構える。
「４５姉！話は後！この人は私を助けてくれたんだよ！だから今は鉄血の殲滅に集中して！」
「９!?無事だったのね！兎に角きちんと説明して貰うわよ！」
４５は９の姿に安堵の表情を浮かべるが次の瞬間には表情を引き締める、そして４０４小隊全員がＲｉｐｐｅｒ達を睨みつけ。
「虫ケラが…立ったまま死ね！」
「やっと何時もの４５に戻ったわね、寝坊助！しっかり援護しなさいよ！」
「うう～…わかったよぉ…いい加減寝たいし…」
そんな４０４小隊の面々を見て９もファルコンに声をかける。
「行こう！ファルコン！」
「ああ！」
もちろんファルコンも負けていない、ＵＭＰ９をリロードし偶然か９とほぼ同じタイミングで同じ言葉を発した。
「「俺（私）の行く道を邪魔するな！」」
ーーーーーーーーーーーー
９とファルコンの参戦で数で勝るはずの鉄血部隊は逆に蹂躙されていた、４５が正確な射撃でＲｉｐｐｅｒの急所部位である頭や胸を

撃ち抜き、４１６は自分と同じ名のＡＲ、ＨＫ４１６のアンダーバレルに装着したグレネードランチャーから榴弾を放ち、複数のＲｉｐｐｅｒを吹き飛ばす。Ｇ１１はスコープを覗き、各々が仕留め損ねたＲｉｐｐｅｒに確実にとどめを刺す。２人の参戦から僅か数十分で包囲していたＲｉｐｐｅｒ達は物言わずの鉄屑へと成り果てた。
「状況終了、皆、無事かしら？」
「ええ、大丈夫よ、完璧に仕留めたわ。」
　４５の言葉に胸を張りながら４１６は答える。
「何体か仕留め損なってなかっ…」
「なんか言ったかしら？寝坊助。」
　ボソッとＧ１１が声を漏らす、それとほぼ同時に４１６はＧ１１の頬を片手で抓る。
「ひゃめてよぉ～…イタタタ…」
　４１６とＧ１１のコントを横目に４５はファルコンに向かい言葉をかける。
「９を助けてくれて感謝するわ、私はＵＭＰ４５、４０４小隊の隊長を務めているわ、できれば仲良くしましょう？」
　笑みを浮かべ、ファルコンへ握手を求める、その笑顔にファルコンはナニカを感じるが今は向こうに合わせた方が良いと判断し差し出された手を握り返す。
「ＢＳＡＡエコーチーム、コードネームはファルコン、自分こそできれば友好的にできればと思っている。」
　２人は然りげ無くお互いの細部を観察する、一瞬ではあるがどちらも見たことの無い装備に、腕につけたワッペンと腕章、結論から言えばお互いに何もわからなかった。
「一先ずＲＺまで急ぎましょう、続きはグリフィンに帰還してからね。」
　４５の言葉にファルコンは了承の意を示す。
「わかった、だが、行ったらいきなり銃を突きつけられる様な事態は止めてくれよ？」
「おぉ！ファルコンも一緒だね！よーし急ごー！」

ナインの笑顔を見て、ファルコンは４１６とＧ１１の方へ歩み寄り。
「ファルコンだ、少なくとも道中足を引っ張らない様にする所存だ、よろしく頼む。」
ファルコンが４１６へ手を差し出し、同じく握手を求める。
「ＨＫ４１６よ、先程の戦闘の動き、見事だったわ。」
「Ｇ１１だよ…お休みぃ～…」
強気な瞳を向け、差し出された手を握り返す４１６と立ったまま寝てしまいそうになっているＧ１１とも自己紹介を済ませ、５人は森を抜け、ＲＺへと足を進めた。

ーーーーーーーーーーーー

異世界へと足を踏み入れた誇り高き隼と存在しない部隊が出会う、そして隼と鷲の邂逅、少女が前線に立ち戦乱渦巻くこの世界、激化する鉄血との戦闘、隼と鷲、２人の猛禽がこの世界に降り立つ時、遂に歯車が動き出す、まるで待っていたかの様に、その結末は神のみぞ知るのかもしれない…

鷲と隼の出会い

ＰＭＣグリフィン＆ａｍｐ；クルーガー本社、其処は鉄血と人類の前線（フロントライン）を支える巨大ＰＭＣ（民間軍事会社）の心臓部、その屋上へと向かうエレベーター内で２人の人物が会話を交わしていた。

「ヘリアン、ＡＲ小隊の帰還はまだなのか？」

人間の、白髪混じりの男だ、それなりに歳を重ねているだろうがその肉体は鍛え上げられ、微塵の衰えを感じさせず、歴戦の雰囲気を漂わせている。

「はい、間も無くヘリで帰還するとのことです、クルーガー社長。」

ヘリアンと呼ばれた女性、銀色の長髪、モノクルを付けた、赤い制服を着ている。

「そうか…しかし別の世界の人間とは、未だに信じられんな。」

クルーガー…本名をベレゾヴィッチ・クルーガー、グリフィン＆ａｍｐ；クルーガー（以降Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ）の創設者にして戦術人形の運用を確立し、Ｇ＆ａｍｐ；Ｋを世界最大手まで成長させた男は顎髭に手を当てて考え込む、長年生きてきたがこのような事態は遭遇したことなど無い。

「失礼、クルーガー社長、４０４小隊から機密通信が、どうやら此方も異世界の人間と遭遇したようです。」

追い打ちをかけるようなヘリアンの言葉にクルーガーは静かに頭を抱えた。

ーーーーーーーーーーー

イーグル、ＡＲ小隊ｓｉｄｅ

『間も無くＧ＆ａｍｐ；Ｋ本社に到着します。』

クルーガー達が頭を抱えている頃、ＡＲ小隊とイーグルを乗せたヘリは順調に飛行を続けていた。

「ねーねーイーグル。」

「なんだ、あー…ＳＯＰＭＯＤⅡ？」

長時間の移動で退屈になったＳＯＰＭＯＤがイーグルへ声を掛けた。

「ＳＯＰで良いよ！あのね、イーグルの世界って本当に鉄血とかわたし達みたいな戦術人形とか居なかったの？」
「あぁ、そもそも戦術人形の様な高度なＡＩを搭載したアンドロイド自体架空の物のような扱いだったからな、どうやらこの世界は俺の居た世界よりも大分技術が発達しているらしい。」
　イーグルの言葉にＳＯＰＭＯＤはそっかーと返しながら自分の席に座り直す。
「しかし手錠も何も無しとは些か無用心じゃないのか？装備も預かりになったのは銃くらいだろう？」
　イーグルは両手を広げてみせる、その手に嵌めているのはアンブレラの開発したタクティカルグローブ、耐刃、耐衝に優れたケブラー繊維を使用し、ナックルガードはカーボンテックファイバーでコーティングされていて、殴るだけでも相手にダメージを与えることができる、某ＢＳＡＡのエースはそれでモールデッドを殴り飛ばしていたが…。
「抵抗する気などこの状況で起きますか？」
　ＡＲ１５がその手に持つＡＲをちらつかせる。
「ジョークだ、流石にＡＲを持っていては敵わないからな。」
　ニヤリと笑うイーグルに対し、ＡＲ１５も笑みを浮かべる。最初は警戒していたＡＲ１５もＳＯＰＭＯＤⅡへのイーグルの対応を見て少しずつではあるが警戒を解いていた、メンバーの中で一番幼い性格であると同時に悪意などにはかなり敏感なＳＯＰＭＯＤⅡが懐いているところをみると悪い人ではないとわかっているからだ。
「しかし随分と重装備なんだな、イーグルはどんな部隊に所属していたんだ？」
　Ｍ１６がイーグルの横に置かれたマスクを持ちながら問う。
「ふむ…簡単に言うならば、君達の言う…Ｅ．Ｌ．Ｉ．Ｄだったか？それと似たような奴らの鎮圧を主にしていた部隊だな。」
「なんと、それならその重装備も納得です。」
「まぁ、詳しくは君たちの本拠地についてからだ、そこで包み隠さず説明する。」

Ｍ４が感嘆の声を漏らすと同時にＧ＆ａｍｐ；Ｋの本社が見え、全員が降りる準備を始めた。

ーーーーーーーーーーー

ファルコン、４０４小隊ｓｉｄｅ

「ねー、ファルコン、どうしたらあんな動きができるの？人形の私達から見てもあそこまでの動きとかＡＩＭは難しいと思うけど？」

「何、長いこと銃を握ってきたからな、それにあれくらいできなくては生き残れないような状況ばかりだったから自然と身についた。」

同じくＧ＆ａｍｐ；Ｋ本社に向け飛行するもう一機のヘリの中で９がファルコンに問う、心なしか少し距離が近い気もするが…。

「こら９、あまり近すぎも良くないわよ。全く…寝坊助に至ってはファルコンの膝で寝てるし…。」

ジロッと睨む４１６の視線の先ではファルコンの太腿に後頭部を乗せ、アイマスクをつけながら寝息を立てているＧ１１が居た、本人曰く「ファルコンの服の触感が枕にピッタリ」とのことらしい。

「悪いわね、ファルコン、ウチのＧ１１が迷惑をかけて。」

４５の謝罪の言葉にファルコンは軽く手を振り。

「別に構わないさ、まだ子供の頃、いつも年下の奴等にはこうやってたからな。」

Ｇ１１のほっぺたを軽く指でつつきながらファルコンは笑みを浮かべる、そこに下心は全くなく、慈しむような笑みにバラクラバを外したファルコンのどこか儚げな印象の素顔も相まって、近くにいた９はもちろんのこと４５と４１６の２人も軽くドキッとしてしまった。

「ほ、ほら！本社が見えてきたわよ！全員降りる準備をして！」

「え、ええ！ほら寝坊助！起きろ！」

「痛い！うぅ…わかったからそんな強く叩かないでよ…。」

どこかグダグタし始めた４０４小隊の面々にファルコンは疑問を浮かべる。そんなファルコンに９が小声で囁いた。

「ファルコン…すごいね、４５姉をあんなに取り乱せられるなんて。」

「待て待て、なんで俺の脇腹を抓るんだ。」

「さぁ～なんでだろうね～？」

そんなやりとりの中５人を乗せたヘリもＧ＆ａｍｐ；Ｋ本社に到着した。

ーーーーーーーーーーー

ＮＯ　ｓｉｄｅ

Ｇ＆ａｍｐ；Ｋ屋上へリポート、現在そこは途轍も無く険悪な雰囲気が立ち込めていた。

「いきなり随分なご挨拶だな？ＢＳＡＡはいつからサイコパス集団に成り果てた？」

自身に向けられたナイフをグローブで受け止めながらイーグルはマスク越しにファルコンを睨む。

「黙れ…！この世界でもアンブレラが存在しているということは又惨劇を繰り返すつもりだろう！その傘が何よりの証明だ！」

始まりはＡＲ小隊と４０４小隊にとって見慣れた光景からだった、４１６がＭ１６に突っ掛かり、それを諌めようとしたファルコンがイーグルの右肩に縫い付けられたワッペンを見た瞬間、ナイフを抜き放ち、イーグルに襲い掛かったのだ。

「お前の言うアンブレラが俺の知ってるアンブレラならもう赤い傘（旧アンブレラ）は存在しない、さっきも言ったがＢＳＡＡならそれくらいは知っている筈だ。」

「何を世迷言を…！傘の色を変えたくらいでお前達が犯した罪は無くならないぞ…俺のようやくできた家族を奪ったあの時のように…！」

ファルコンの慟哭にイーグルも共鳴するかのようにマスクを取り、声を荒げた。

「家族を奪われた…か、それは此方も同じだ！俺達、新生アンブレラはその贖罪の為に戦っている！俺は旧アンブレラの人間だが、俺が旧アンブレラの犯した罪を知った時はその罪を償おうとする者は俺も含め沢山居た！俺も目の前で両親や仲間が食い殺された！テメェだけが苦しみを背負っている訳じゃないんだぞ！」

益々ヒートアップする２人に先程までＭ１６に突っ掛かっていた

４１６もその怒気に思わず身がすくみ、慌てて止めようとしたＭ１６はイーグルの言葉に思わず声が詰まってしまった。
「随分と騒がしいが何かあったのかね？」
消して大きくはない、しかし威厳のある声が響く、ＡＲ、４０４両小隊が声のした方向を見るとそこにはクルーガーがヘリアンと共に此方に歩いてくるところだった。
「ふむ…」
クルーガーは一息つくと最早インファイトにまで発展し始めたイーグルとファルコンを見やる。
「そこまでにしておけ、これ以上この場を騒がすなら此方も考えがあるぞ？」
クルーガーは警告するが冷静さを失った２人は聞く耳を持たず、クルーガーへ
怒鳴り返す。
「「関係ない奴が口を挟むな！」」
イーグルは右ストレート、ファルコンは左フックをクルーガーへ繰り出す…が
「ふん、こそばゆいな。」
「「!?」」
なんとクルーガーは身動ぎ１つせず、２人のパンチをその身に受け止めたのだ、信じがたい光景に２人は一気に熱が冷め、冷静さを取り戻した。
「さて、落ち着いたかな？」
苦悶の声も上げず、クルーガーは２人を諭す。
「ッ…申し訳ありません、関係ない貴方に手を出してしまって…」
「此方もです、増してや助けて頂いた貴方達に迷惑を掛けてしまいました…」
２人は深く頭を下げ、クルーガーは頷くとヘリアンに目配せをし、この場は任せて欲しいと伝えた。
「畏まりました、ＡＲ小隊、４０４小隊は各員補給を済ませ、今回の件を纏めるよう、後に改めて今後の指示を出す、それまでは各員待機す

るように。」
　クルーガーとヘリアンの雰囲気を察してかＡＲ小隊、４０４小隊の面々は敬礼をするとそれぞれの宿舎へと向かった。
「さて、事情を説明して貰えるかな？異世界からの客人？」
　クルーガーの言葉に２人は大きく頷いた。
ーーーーーーーーーー
Ｎｏ　ｓｉｄｅ
「成る程、バイオテロにＢＳＡＡ、それにアンブレラ社…すまないな、どれも聞いた事がないし過去のどの文面にも記録がない。」
　場所をグリフィン本社、クルーガーのオフィスに移し、イーグル、ファルコン、クルーガーの３人は早速お互いの状況を話し合っていた。
「此方はまず２０６０年の地球がこの様な惨状になってるのが信じられません…それに１９０５年のコーラップス…この様な代物はどの国からも見つかってはいません。」
　デスクの上に置かれた資料の中の年表を見ながらイーグルが声を出す、そしてファルコンはイーグルへ声をかけた。
「イーグル、お前の言うことを聞いているとどこか俺とも食い違いが無いか？」
「…嫌な予感がしなくも無いんだが、ファルコン、お前が死んだのは何年の何月何日だ？」
　面倒な事になると確信しながらイーグルはファルコンへ尋ねる、クルーガーも顎に手を当てながら聞く。
「西暦２０１３年、６月３０日だ、場所もはっきり覚えている、中国、ターチィだ。」
　ファルコンの言葉にイーグルはＣ―Ｖｉｒｕｓのあの事件か…と小さく呟き、口を開いた。
「ファルコン、俺は２０１７年１２月１４日に死んだ筈なんだ、そして此処からが肝心だ、俺はクリス・レッドフィールドにも会った事がある、そしてレッドフィールドからはお前の様な存在は聞いた事が無い、しかしＣ―Ｖｉｒｕｓのあの事件は起きている、そうなると…」

イーグルの説明に被せるように話を聞いていたクルーガーが口を開いた。
「パラレルワールド…平行世界か？」
クルーガーの確信した意見に二人も同意する、その見解が一番辻褄が合うからだ。そしてクルーガーは２人にある話を持ちかける。
「ふむ、二人は実戦経験は有るな？」
クルーガーの言葉に二人は勿論有ると答える。そしてクルーガーの口から出た言葉は…
「我がＧ＆ａｍｐ･Ｋの戦術人形、及び新任指揮官の練度向上、そして戦術人形を率いる指揮官として鉄血と戦っては貰えないだろうか？」
なんとクルーガーが頭を下げ、２人に戦術人形を率いる指揮官、並びに教官になって欲しいと頼み込んだ。
「…身元もハッキリしない、それも初対面で殴り掛かった怪しい人間２人にその様な事を頼むとは思いませんでした…」
「何か理由でも有るのですか？クルーガー社長。」
２人は当然訝しむ、いきなり指揮官になって欲しいなどと普通ならばあり得ない事だ。
「現在、我が社に所属している指揮官は実戦経験が十分な者は少なく、殆どが民間人上がりの者が多いのだ、故に着任して早い段階で殉職してしまう指揮官も少なからず居るのだ、少しでも犠牲を減らす為にも是非君たちに指揮官になって欲しい。」
クルーガーの言葉に２人は迷わず返答を返す。
「此方こそ、助けて頂いた恩もあります、その件、受けさせて下さい。」
「…ありがとう、君達のＧ＆ａｍｐ･Ｋ指揮官就任を心より歓迎する。」
２人は敬礼をしクルーガーと固く握手を交わした。